序

外国語インテンシブコースの拡充や「地域文化論」の開設にご尽力するなど，日吉における法学部教育を，学生にとって有意義であることはもちろん，教員にとっても働きがいのあるもの，他に誇れるものへと昇華させた功労者である三瓶愼一先生が，2025 年 3 月 31 日をもって定年退職される。

三瓶先生は早稲田大学法学部から慶應義塾大学大学院文学研究科に進まれ，ドイツ語の研究，教育の道を歩まれた。1989 年，法学部に専任教員として着任され，以来 36 年にわたり，法学部での教育に献身された。

三瓶先生といえば，何といってもその溢れるばかりのドイツ語愛，外国語教育への情熱である。外国語教育が法学部のアピールポイントの一つとなったのは，三瓶先生のお力による部分が大きい。1991 年に大学設置基準の大綱化が実施されることに合わせて，日本中の大学でカリキュラム改革の動きが盛んとなったが，若き日の三瓶先生は同志の先生方とともに，外国語科目も教養科目も 4 年間学べるカリキュラムを法学部に創出するべく奔走された。これらの科目は大学 2 年生までという考えがまだ根強かった時代のことである。

三瓶先生は特に，英語でのみ行われていたインテンシブコースを他語種にも広げることに注力され，その甲斐あってドイツ語，フランス語，中国語，スペイン語，ロシア語にもインテンシブコースが設置された。その後朝鮮語が続き，さらに 2025 年度にはアラビア語も加わることとなっている。これだけの語種数で 4 年間継続してインテンシブコースで学べるカリキュラムが作られたことは，非常に画期的であったが，その礎石を据えたのが三瓶先生であった。この試みは他学部や他大学にも注目され，モデルとなっていく。

私も同じ学部のスペイン語教員として，三瓶先生が緻密に計算し，丹念に作

り上げたドイツ語インテンシブコースを大いに参考にさせてもらった。たとえば三瓶先生は，おそらくは法学部での教育であることを意識され，法学部生の専門や関心に結び付いたドイツや日本の諸問題をドイツ語で発信する力の養成に重きを置いていたように思う。私はその姿勢に共感し，法律学や政治学，あるいは広く社会科学の視点や用語を，スペイン語を通して学べるような授業の設置を試みた。三瓶先生が築き上げていたドイツ語教育は，新興のスペイン語教育を担う身としてはあまりに高峰であったのだが，それだけ励みにもなった。私が法学部に着任してまだ数年の頃，ある冊子にスペイン語の紹介文を書いたところ，面白い文章だと三瓶先生にお褒めいただいたことがあり，とても嬉しかったことを覚えている。

三瓶先生は『CD で学ぶドイツ語入門』（白水社，1999 年）など，ドイツ語学習の入門書，教科書をご執筆され，ドイツ語学やドイツ語教育・教授法に関する論文も多数おありである。国際ドイツ語教育連盟の副会長をお務めになるなど，国際的にもご活躍されてきた。ドイツ語教育界では大家のお一人である。

学部においては，学習指導副主任，常任委員など要職を歴任された。塾の国際センター副所長の重職も長くお務めになられたが，国際教育の指南役としてはまことに適任であった。教育や大学の在り方などについて一家言お持ちで，会議などで時に発せられるそのお言葉には非常に鋭いものがあった。塾の上層部に対しても臆せず意見されるその姿勢，強い意志には敬服させられる。私も会議の司会を務めるときなど，三瓶先生のご発言にはドキドキしたものだが，深く首肯させられることもしばしばであった。

会議では鋭い三瓶先生だが，普段はとてもにこやかで，お話好きである。三瓶先生のかつてのお住まいが私の現住所と近く，同じ駅が最寄りであったことなどお話したことがある。また，つい最近，三瓶先生が魚釣りをご趣味としていると伺ったのだが，魚類に関しては私は食することが専門，家で飼われている小魚を観察するのが副専攻，といった程度なので，太公望の三瓶先生にお話が合わせられずに恐縮した。

大きな足跡を残された三瓶先生が退職されるのはまことに寂しく，残念なことであるが，今後もその類まれなるバイタリティーを発揮され，各方面で大い

にご活躍されることと思う。これまでのご貢献，ご好誼に感謝しつつ，三瓶先生のいっそうのご多幸，ご健勝をお祈り申し上げる。

2025 年 2 月

法学部日吉主任　大久保教宏